京都大学	博士（文学）	氏名	三上航志
論文題目	デカルト道徳哲学の射程		

（論文内容の要旨）

本稿は、これまで等閑視されがちであったデカルトの道徳哲学を、下記の二軸に従って分析するものである。第一の軸とは、明証的な知の探求とそれに伴う主体の変容という軸である。本稿の第1章から第4章まではこの軸に従って考察が進められ、智恵の探求、内的な傾向性の陶冶、行為に基づく至福といった論点が取り扱われた。他方で、第二の軸とは、心身の合一した主体がもつ生の厚み、さらには感覚的昏さという軸である。本稿第5章及び第6章で問題にしたのは、この軸に基づくものであり、心身の合一、感覚や情念、習慣といったキーワードが論点として浮かび上がった。以下、本稿の章立てに従って、その内容を簡潔にまとめる。

本稿第1章では、デカルトの道徳を捉える際に必要となる枠組みについて議論した。今までデカルトの道徳としては三つの道徳の構想が語られてきた。すなわち、「暫定道徳」「決定的道徳」「最高で完全な道徳」の三種類である。第1章では、『哲学原理』仏訳序文に現れた「最高で完全な道徳」を、単なる理念に過ぎないとみなすゲルーに代表される解釈について、「智恵」という概念に着目することで、批判的に検討した。その結果、「最高で完全な道徳」は智恵の最後の段階であると規定されていること、さらには、智恵にはその獲得のための段階と手続きが設定されていることを明らかにした。そして、智恵の最後の段階である第五段階の智恵とは、第四段階までの智恵を原理に基づく知によって漸次的に洗練させ、主体の感情に関する内的傾向性を陶冶することで獲得される卓越した判断能力であるということが確認された。こうして、「最高で完全な道徳」という構想は、形成途上ではあるものの、主体の完成を目指した「精神の陶冶」の学として捉えられる限りで、廃棄されたと見なされる必要はないと結論した。また、ゲルーの解釈の問題点とは、テクスト的な根拠がないままに、「最高で完全な道徳」を、原理から引き出された確実な知識を実践的な個別問題に応用させ、行為の規範を直接に規定する学と見なしたうえで、「決定的道徳」というデカルト自身の用語でない構想を語っている点にあると指摘した。このように、デカルトの道徳として語るべき構想とは、「最高で完全な道徳」と「暫定道徳」の二つであることが確認された。

続く第２章では、「最高で完全な道徳」と「暫定道徳」の間に見出すべき関係について照準をさだめ議論を進めた。まず、暫定道徳の各格率の内容を簡単に確認したうえで、暫定道徳の諸格率がなぜ「三つあるいは四つ」と曖昧に数え上げられていたのかという問題に関して議論した。その結果、第四格率とその他の格率がもたらす「依

存の循環」という関係が、この曖昧さを引き起こしていたことを確認した。次いで、第四格率の射程を確認し、理性の陶冶を勧めるこの格率は、第1章で注目した「智恵の探求」への指示であることを確認した。さらに、1645年8月4日付エリザベト宛書簡において現れる、「新しい三つの格率」と「暫定道徳」の比較を行い、前者においては第四格率が消失していることを確認し、この理由を、デカルトが自身の『哲学原理』を確立したことに伴い、「理性の陶冶」を一定程度果たすことができたからであると解釈した。以上の考察を踏まえ、「暫定道徳」と「最高で完全な道徳」の関係を議論し、「最高で完全な道徳」の構想とは、「暫定道徳」が記述された最初の段階でその中に既に胚胎していたものでありながら、最終的には、暫定道徳を乗り越えていくものであると指摘した。こうして、デカルトの道徳哲学を議論するということは、差し当たっては、原理に基づく知と実践における行為の一般的関係を問うことに他ならないということを明確にした。

続く第3章は、こうして見出された「知と行為」という問題意識に基づいて、デカルトにおいて知はどのような仕方で主体を変容させ道徳的行為をもたらすのかという問いを立て議論を進めた。まず、プロバビリスムや決疑論という思想史的伝統を確認したうえで、暫定道徳におけるそのデカルトによる受容を確認した。次いで、デカルトは、自身の哲学原理を確立した以降であっても、プロバビリスムを特徴づける蓋然性を道徳の領域から駆逐することなく、むしろ、彼は、原理に基づく知によって、実践的領域が蓋然性を含んだ領域であることを形而上学的に基礎づけているのであって、これこそがデカルトにおける知と行為が取り結ぶ第一の関係であることを明らかにした。次いで、1645年9月15日付エリザベト宛書簡に立ち返り、原理に基づく知は、気質・傾向性のレベル、反省的レベルの二層にわたって道徳的主体に影響をもたらし、このことによって、道徳的主体は、経験的調査によって明らかになった規範を直観的に実効化することが可能となっていることを確認した。こうして、デカルトの道徳・倫理は、原理に基づく知によって基礎づけられた、道徳哲学・倫理学と見なされるべきであると主張した。そして最後に、デカルトの道徳をプロバビリスムから神への愛への進展として捉える解釈を批判的に検討し、確かにデカルトの書簡における道徳の中には「神への愛」を中心とする神秘主義的な発想を見て取ることができるものの、その意義とは、あくまでも、哲学の原理に基づく知によって実践においてよく判断することのできる主体を形成し、意志的行為において自然的至福を獲得するという世俗的な点において理解されなければならないということを確認した。こうして、デカルトの道徳哲学における知と行為が取り結ぶべき第二の関係とは、原理に基づく知が主体を変容させ有徳なよき主体を作り上げ、実践的行為の遂行において至福を獲得させるということにあると解釈した。

続く第4章では、書簡の道徳と『情念論』の道徳との間の差異に着目し、神への愛を

中心とする前者と、自由意志に根拠を置く高邁を展開する後者の両者をいかに結びつけることができるのかという問いを起点として、「高邁」の道徳を知と行為という観点から分析することを試みた。まず、高邁の17世紀的な意味合いとそのデカルトにおける受容を簡単に確認したうえで、高邁の中核には「正当な自己重視」という概念があることを確認した。さらに、1647年6月6日付シャニュ宛書簡に着目することで、正当な自己重視とは、自己そのものの重視というよりもむしろ、被造物全体を構成する一部としての自己の重視を意味するのであり、創造主たる神への愛にその形而上学的根拠の一つを持っていることを明らかにした。さらに、ロディス=レヴィスの解釈を参照することで、正当な自己重視のもう一つの形而上学的基礎が、1647年になって明確に自由意志に与えられるようになったことを確認し、正当な自己重視と自由意志が結びついていることを確認した。こうして、「正当な自己重視」という概念を蝶番にして、神への愛と自由意志の両者が、高邁を支える二つの形而上学的基礎として結びついていることを明確にし、「書簡の道徳」と「情念論の道徳」は統一的に解釈しうると主張した。さらに、この神への愛と自由意志という高邁の二つの形而上学的基礎は、既に1645年9月15日付エリザベト宛書簡に胚胎しており、これが後のテクストにおいて発展させられた結果、高邁の道徳に結実しているという解釈を提示した。しかしながら、最後に、高邁なる者がもつ決意の様態に着目することで、高邁なる者は、原理に基づく知の省察だけでなく、実生活における実際の意志の使用、あるいは、心身の合一に依存する情念と意志との対決に由来する「習慣」にも、その源流をもっているということを示唆した。こうして、デカルトの道徳哲学を語るうえで、心身の合一した主体がもつ生の厚みに着目する必要があることを明確にした。

こうして、第5章では、「心身の合一」をめぐってデカルトがエリザベトと交わした議論に軸足を移し、その内容と射程を理解することを目指した。その結果、以下の五つの哲学的含意を引き出した。第一に、デカルトが1643年にエリザベトと交わした心身の合一に関する議論の射程とは、あくまでも心身の合一という力の概念の明晰化を目指したものであり、それを基礎的な存在者に訴えて形而上学的に説明するものではないということ。第二に、心身の合一という概念は、物体間で働く因果的な力の概念なのではなく、生の厚みに支えられた可変的かつ目的論的・志向的な力の概念であるということ。第三に、このような目的論的・志向的な力の概念を伴った心身の合一という概念は、生命体において生命体の保存のために働く合目的的な力をまとめ上げているという点において、アリストテレス的な魂の概念に近接しており、デカルトにおける「心身の合一」という概念は「身体に合一した魂」の概念と呼んだ方が適切であるということ。第四に、「心身の合一」という概念は、動物と異なり複雑な記号と状況の中で生きその中で特権的な地位を保ち続けている「真の人間」という存在が切り開く、人間的自由の領域に対応したものであるということ。そして第五に、心身の合

一という概念を把握するために「日々の生活と交流」に立ち返ることを勧めるデカルトの意図とは、エリザベトの魂から悲しみを取り除き幸福へと導こうとする、治療的なものでもあったということ。以上の五点である。そして、この最後の点に着目することで、本稿は、デカルトの道徳哲学を考える際の軸として、知の明証性の内に邁進しよく判断できる主体として変容していくデカルトの姿だけでなく、心身の合一した主体がもつ生の厚みや感覚的昏さをも考慮する必要があると主張した。

続く第6章では、心身の合一に依存すると言われる「情念」と「内的感覚」をめぐって議論を行った。まず、情念と内的感覚に関するスコラ的定義を確認し、スコラ的な定義によれば、情念とは「身体的運動を伴った魂の感覚的欲求の運動」であり、内的感覚とは道徳的価値の評定を行う評定力や思考能力を含む、幅広い一連の諸能力を表す用語であることを確認した。次いで、『哲学原理』第四部190項の記述に着目し、こうしたスコラ的伝統に反し、デカルトにおいては、内的感覚とは、生理学的な視点に基づいて、情念と自然的欲求を含む類概念として取り扱われていることを確認した。続いて、『情念論』に議論の主軸を移し、『情念論』においては、情念と自然的欲求を同一の類のもとに把握させる内的感覚という概念が放棄されていることを確認した。さらに、『情念論』第1部の構成と方針を確認することで、『情念論』において、情念とは、魂の内においてほかの知覚から区別するという視点と、魂と身体の相互作用に関する生理学的視点という、二重の立場から定義されているということを明らかにした。こうした議論を踏まえて、『情念論』において、情念と自然的欲求を取りまとめる内的感覚という概念が放棄された理由を考察し、デカルトは、1645年以降になってはじめて、魂の運動と身体の運動との絡み合いという固有の特徴を明確に意識したからであると解釈した。そして、最後に、デカルトにおける情念の定義に関する方法論を明確にした。すなわち、情念とは、魂と身体の間の二重化された運動性、言い換えると、魂と身体の間の二重の運動の絡み合いという性質を本性的に抱えたものでありながら、デカルトはこれを統一的に把握することを可能にするアリストテレス的な「身体の形相としての魂」という概念を廃棄してしまったがために、情念という現象を一つのものとして捉える場を失った。そのために、デカルトがとった方法論とは、情念がもつ存在論的な身分に従って、複層的であるものの恣意的ではない仕方で、情念をできる限り明晰に定義していくという方法論に他ならなかったと結論付けた。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、これまで等閑視されがちであったデカルトの道徳哲学について、明証的な知の探求とそれに伴う主体の変容という軸と、心身の合一した主体がもつ生の厚みという軸の二軸からの解明を目指す意欲的な研究である。

第１章では、デカルトの道徳を捉える際に必要となる枠組みが論じられる。これまでデカルトの道徳としては、「暫定道徳」「決定的道徳」「最高で完全な道徳」（以下、完全道徳）の三つが語られてきた。論者は本章で、『哲学原理』仏訳序文で語られる完全道徳を単なる理念に過ぎないとみなすゲルーに代表される解釈を批判的に検討している。論者によれば、ゲルーの解釈の問題は、テクスト的な根拠のないまま、完全道徳を、諸原理から引き出される確実な知識を実践的な個別問題に応用し、行為規範を直接に規定する学と見なす点、および「決定的道徳」というデカルト自身の用語ではない構想を語っている点にある。その上で、智恵の最後の段階である第五段階にあるとされる完全道徳の構想は、主体の漸次的な完成を目指した「精神の陶冶」の学として捉えられる限りで、廃棄されたと見なす必要はないと結論される。こうして、文献の緻密な読解に基づき、デカルトの道徳の構想は完全道徳と暫定道徳の二つであることが確認されている。

第２章では、完全道徳と暫定道徳の関係の解明が試みられる。『方法序説』において暫定道徳の格率は「三つあるいは四つ」と曖昧に数え上げられているが、論者によれば、理性の陶冶を勧める第四格率は他の三つの格率の結論であると同時に基礎となっているという「依存の循環」がある。次いで論者は、エリザベト宛書簡において現れる「新しい三つの格率」と暫定道徳の比較を行い、前者において第四格率が消失している理由を、デカルトが自身の「哲学原理」を確立したことに伴い、「理性の陶冶」を一定程度果たすことができたからだと解釈している。以上の考察を踏まえ、完全道徳の構想とは、暫定道徳が記述された最初の段階でその中に既に胚胎していたものでありながら、最終的には、暫定道徳を乗り越えていくものだと論じられる。

続く第３章では、デカルトにおいて原理に基づく知はどのような仕方で主体を変容させて道徳的行為をもたらすのかという問いが立てられる。論者はまず、プロバビリスムや決疑論という思想史的伝統をデカルトが継承しており、実践的領域が蓋然性を含んだ領域であることを明らかにする。その上で論者は、デカルトの道徳は、単に世俗的で蓋然的な風習や習俗に従うことを勧めたものではなく、原理に基づく知によって行為を基礎づけるという意味で道徳哲学と呼ぶことができると主張する。

第４章では、このような知と行為の関係の探究という観点から、『情念論』における「高邁」の道徳が分析される。論者は、高邁の中核には「正当な自己重視」という概念があるとし、この概念を蝶番にすることで、神への愛と自由意志の両者が高邁を支える二つの形而上学的基礎として結びついていることを明確にし、こうして書簡の道徳と『情念論』の道徳が統一的に解釈できると説得力のある仕方で主張している。

第５章では、「心身の合一」をめぐってデカルトがエリザベトと交わした議論が綿

密に検討されている。論者がそこで得た主な結論は、心身の合一に関する議論の射程は、あくまでも心身の合一という力の概念の明晰化を目指したものであり、形而上学的に説明するものではないということ、また、心身の合一という概念は、物体間で働く因果的な力の概念なのではなく、目的論的・志向的な力の概念であるということ、さらに、心身の合一という概念を理解するために「日々の生活と交流」に立ち返ることを勧めるデカルトの意図は、エリザベトの魂から悲しみを取り除き幸福へと導こうとする治療的なものでもあったということ、である。このような論者の見解は、心身二元論の問題に独自の解釈を施した上で、デカルトの道徳哲学を考える際の軸として、心身の合一した主体がもつ「生の厚み」や「感覚的昏さ」を考慮する必要があると説く点で極めて示唆に富むものである。

第６章では、心身の合一と関連して「情念」と「内的感覚」をめぐる分析が行われている。論者は、『哲学原理』と『情念論』との間で情念と内的感覚の定義に相違があることを指摘し、この原因をスコラ的伝統に遡って検討している。論者は、この相異の原因を、1645年以降のデカルトの情念に関する研究の進展という点に求めている。こうした分析は、情念に対するデカルトの理解を詳らかにしているだけでなく、心身の合一に属する主題が、エリザベトとの対話を経ることで深められていく様子を証拠立てるものでもあり、デカルトの道徳哲学の展開を考える上でも重要である。

このように、本論文はデカルトの道徳哲学に関して、知の探究と主体の変容という第一の軸と、日々の生活と交流、論者の言葉では生の厚みに基づく感覚的昏さを受け入れるという第二の軸を設定し、一次文献と国内外の二次文献を縦横に検討することを通じて、デカルト道徳哲学の豊かな広がりを描き出している。とりわけ第二の軸に関して、1643年から本格化するエリザベトとの対話が重要であるという指摘、すなわちデカルトの道徳哲学の内実と発展を検討する上での書簡の重要性が強調されている点は高く評価されてよい。本論文が今後のデカルトの道徳哲学に関する研究にとって必須の基礎文献になるであろうことは間違いないと言える。

あえて本論文の課題を指摘するとすれば、論者が提示したデカルト道徳哲学の二つの軸が相互にどのような関係を持っているかが明らかでない点や、当時あるいは現在の道徳哲学で問題となるような幸福、最高善、徳、自然法、神の役割といった概念が主題的に検討されていない点などが挙げられるだろう。しかし、論者も序文で断わっているように、本論文は今後の研究のための「鳥瞰図」を提供しているものと考えるならば、ここで築いた土台を基に、今後のさらなる研究成果が期待できるであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2024年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。